

水木しげる氏

表紙絵

＝お～い！鬼太郎＝

表紙絵：水木しげる

- ・ 特集 調布市立図書館 開館50周年 2～6
 図書館開館 50周年を迎えて
 写真で見る図書館の歴史
 50周年記念キャラクター「じろ」が生まれました
- ・ 大活字本をご利用ください 7
- ・ 地域ゆかりの歴史・文化・伝統 8

特集

図書館開館 50周年

調布市立図書館開館50周年を迎えて

調布市立図書館長 小池信彦

昭和41（1966）年6月調布市立中央図書館が開館しました。今年で50年となります。

調布市制10周年記念事業の一つとして中央図書館が建設され、「すべての市民によい読書を」「市民に親しまれる市民のための図書館を」「青少年、勤労者、親子のための図書館を」を目標として活動が開始されました。

その後、国領分館の建設を皮切りに昭和57（1982）年開館の佐須分館まで市内に11箇所の図書館が開設されてきました。元館長 萩原祥三の著作『買物籠をさげて図書館へ』のとおり、今でも、いつでも、どこでも、だれでも、という目標を掲げてサービスを行っています。

昭和20年代、30年代、日本は戦後復興ということで社会状況も大きく変わった時代でした。町村合併を経て調布市制へ移行した時期で子育て世代も増加するなかで、勉強部屋として旧中央公民館は夏休み時期など連日満席な状況もありました。勉強部屋にとどまらない、読書環境を整備し、学習する人たちを支援することがまちづくりに必要だという考えもあり図書館が設置され、活動をこれまで続けてきました。

『調布市立図書館20年の歩み』（昭和62年）に萩原元館長が寄せた文章に次

の一節があります。「市民は自ら学ぶ手段に欠かなければよいのであって、市民にとっては自己教育があるのみと考えているだけである。（中略）何処で、何時、何を、学ぼうともそれは市民の内的自発性によるものであり、それ以外に教育行為という人間の営為はないと考えている」。

読書をどのように捉えるかは人それぞれであり、何か目的を持って本を読む人もいるでしょうし、ひたすら楽しいからという人もいます。図書館の利用は何が正しいということはないと思います。

課題解決型図書館という表現もあり、テレビや雑誌などでも紹介されています。課題は時々で違うこともありますが、今の話題だけではなく、これまでの蓄積を生かした情報提供ができることが図書館の強みです。市民の身近にある図書館の強みも生かしながらこれからも役立つ図書館を目指して活動してまいります。



※読書相談や調べものなど、

お気軽にカウンターにお寄せください。

写真で見る図書館の50年

昭和41年、調布市制施行10周年記念事業の一環として中央図書館が誕生しました。開館当時は、現在のセントラルレジデンス調布（布田4-17-10）の一角にあり、鉄筋コンクリート2階建て、床面積566平方メートル、蔵書数5,623冊という規模でのスタートでした。その後、「人口2万人に1館」「半径800メートルに1館」「2つの小学校区に1館」という3原則のもと分館網を整備し、昭和44年の国領分館から昭和57年の佐須分館まで、計10館の分館が開館しました。

さらに、昭和60年に中央高速道路の高架下に、収容能力20万冊規模の資料保存庫が完成しました。

平成7年、中央図書館は文化会館たづくり内に移転しました。床面積は約4,400平方メートルとなり、映画資料室やハンディキャップサービスコーナーなどを設置するなど、大きく生まれ変わりました。



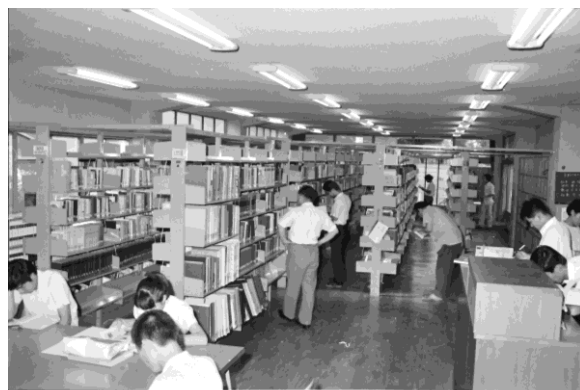
建築中の旧中央図書館（昭和40～41年）



開館当時の旧中央図書館（昭和42年）
開架式で、前面道路から大きなガラス越しに内部が見える設計。
当時の図書館建築としては斬新なものでした。



中央図書館の屋上から見た風景（昭和43～45年頃）
奥に見える大きな白い建物は市民センター（現・教育会館）。その右隣に現在の市役所庁舎が完成するのは昭和46年。



旧中央図書館1階（昭和42年）



国領分館開館式（昭和44年）
一番最初の分館が開館しました。



ブックリスト『このほんよんで!』刊行
（昭和60年）

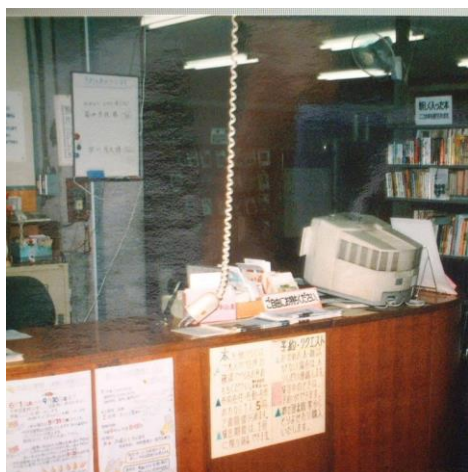


図書館だよりの表紙絵（昭和63年）
水木しげる氏の作品になりました。



第1回図書館まつり（現・樟まつり）開催
（昭和47年）

昭和48年には、調布ブッククラブ（現アカデミー愛とぴあ）が正式に発足しました。



コンピューター導入（平成3年）
旧中央図書館カウンター



現中央図書館開館（平成7年）
文化会館たづくり内、4階・5階（一部）・地下書庫が図書館のスペースとなり、規模が拡大しました。



調和分館開館（平成１４年）

昭和４５年に開館したつつじヶ丘分館を閉館し、調和小学校（野川小学校と大町小学校が統合）に併設された調和分館が開館しました。



視聴覚資料室開室（平成１９年）



ブックリスト『小学生にすすめる本』刊行
（平成７年）



新深大寺分館開館（平成２３年）

昭和４６年に開館した深大寺分館は北東へ約１００ｍ移転開館しました。屋上緑化や太陽光パネル発電設備を取り入れています。



東日本大震災（平成２３年）

調布市では震度５強が観測されました。計画停電などもあり、貸出業務中止や開館時間の短縮等の影響がありました。



地震で落下した神代分館の文庫本（平成２７年）
９月１２日早朝、調布市で震度５弱が観測されました。市内数か所で水道管破損等の被害がありました。



50周年記念キャラクター

じろ

より

ご挨拶!



こんにちは!「じろ」です!

調布市立図書館の50周年を記念して
生まれました。

今年1年、図書館を盛り上げていきます!

誕生日は図書館と同じ6月10日。

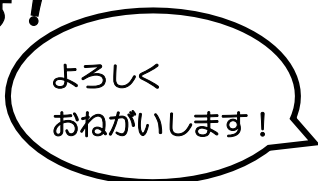
メジロのオスです。

よくウグイスと間違えられてしまうのが残念です。

メジロの「じろ」と覚えてくださいね。

趣味は読書とひなたぼっこ。性格は温厚で真面目。

好奇心が旺盛なので、図書館のいろいろなところに出没しますよ〜♪



職員の名札にぼくがいることに
気づいていただけましたか?
今後、ポスターや印刷物でも見つけてください!



50周年を記念して予定していること



記念グッズ

来館のみなさまに配布できるものを考えています。



布の遊具

今までにないくらい大きいものを作成中。イベントでお披露目予定です。



50周年記念誌

50年という節目にふさわしく、昔の写真や資料も集めて編集集中です。



イベント

- ・50周年記念調査報告会
(2016年10月15日:文化会館たづくり会議室)
講師:古橋研一氏「多摩川を渡ってきた禅寺丸柿」
- ・50周年記念講演会
(2017年3月18日:文化会館たづくり大会議場)
※講師は決まり次第お知らせします。
- ・記念展示会 2016年10月15日~16日 文化会館たづくり601・602会議室
「多摩川を渡ってきた禅寺丸柿」関連資料・図書館の懐かしい写真・昔の図書館用品などを展示する予定です。
- ・図書館各館でも写真等の展示を予定しています。



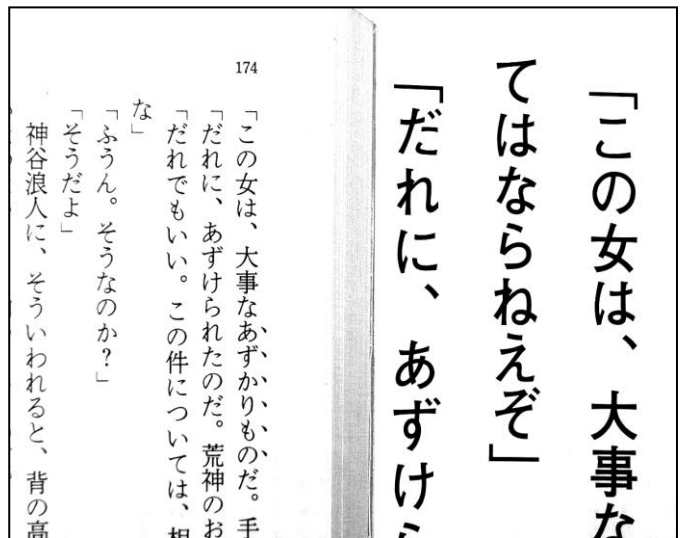
2016年4月1日より

障害者差別解消法が施行されました

調布市立図書館では、図書館利用に障がいのある方のためにハンディキャップサービスを行っています。サービスの一部をご紹介します。

●大活字本をご利用ください

大活字本は、通常の文字よりも大きい**18～22**ポイントのゴシック体で印刷されており、小さな文字を読むことが難しい人でも読みやすい本です。近年は、白地に黒い文字のほか、黒い背景に白抜き文字の白黒反転版も出版されるようになってきました。



中央図書館4階と分館の書架に並べてあり、どなたでもご利用いただけます。分館では、限られた書架と資料を有効に活用するため半年ごとに入替えを行っています。また、毎年、大活字本の所蔵目録を作成しています。

活字の大きさの比較（右が大活字本）

●宅配サービス

市内在住の方で、心身の障がい・高齢・病気などのため、図書館を利用したくても来館が困難な方を対象に宅配サービスを行っています。図書宅配協力員（市民ボランティア）や職員・嘱託員が、市内11の図書館から直接本をお届けします。（※事前に宅配サービスの登録が必要です。）

ほかにも、音訳・点訳サービス、布の絵本・マルチメディアDAISYの貸出しなどを行っています。

お問い合わせは 調布市立中央図書館 ハンディキャップサービス係（電話042-441-6191）または各分館へどうぞ。

深大寺の高浜虚子像

井上明枝

本堂の左側、元三大師堂の石段下の脇に高浜虚子の胸像と句碑があります(写真)。虚子は正岡子規の弟子として俳句雑誌「ホトトギス」を主宰して発展させた高名な俳人。胸像の制作者は石井鶴三で、二科会を創立した石井柏亭の弟。彼も彫刻・画家として活躍しました。

胸像制作は雑誌「ホトトギス」500号(昭和13年4月号)記念として企画されました。記念誌の座談会で虚子が語るところによれば—10年ほど前、東京日日・大阪毎日新聞が企画した「日本新八景」の景勝地選定投票で、石井鶴三とともに選定委員をつとめ信頼感を持ったという。また「新聞で挿絵を常に見ており(朝日新聞連載の吉川英治作「宮本武蔵」)、私の文章の挿絵を描いてもらったこともあり、その芸術に対する理解も多少できているところから、胸像を作るという話になるならば、石井君を^{わずらわ}煩^{わづらわ}したいと考えた次第です」と語っています。

虚子は鶴三のアトリエへ18回も通い、一方の鶴三も虚子の吟行に同伴してスケッチを重ねましたが、芸術家としての虚子の心のうちを、どう表現するか集中していたといわれます。鶴三の日記に「8月19日 高浜氏寿像胸像お渡し」とあります。11月3日、調布市上布田にあった虚子の持家の庭で除幕式が行なわれました。その持家が売却されたため、胸像は昭和21年、深大寺に移されました。

虚子と鶴三と、もう一つの大きな関わりは虚子の死後に訪れました。昭和34年4月8日、虚子が85歳で死去。翌9日の鶴三の日記には、鎌倉の高浜家からデスマスクの制作の依頼があり、その日に鎌倉に行き石膏をとったことが記されています。厚い信頼があったのでしょう。デスマスクは4月13日に完成、「ホトトギス」の口絵として掲載されました。

「調布市百年史」によると、第2次世界大戦が激しくなった昭和18年ごろから調布に疎開してくる人々が増え、虚子の子息、池内友次郎が上布



田に疎開してくると、虚子も一緒に住みました。多摩の横山の風景が気に入ったといわれます。地元句界の「淙々吟社」同人とも親しくなり、同年11月3日には虚子宅で句会が開かれました。秋草の咲き乱れる草原にテントが張られ、おでんを食べながらの青空句会。中村草田男、友次郎、柏翠ら一流俳人と地元俳人多数が交歓し盛会でした。当日の虚子選38句は矢田部良平(青舎)宅に保存されています。

そして翌年10月9日、十三夜の宵に再び虚子を囲んで句会が開かれました。そのときは虚子の二女である星野立子や中村汀女ら女流俳人も加わって、はなやかな会でした。虚子も一句「名月や^{うばすて}姨捨後の月はこゝ」を残しています。

平成15年5月、深大寺境内の虚子像の左側に自然石の句碑が建立されました。虚子が終生、好んで染筆したという26歳(明治33年)の時の作品が刻まれています。

「遠山に 日の当りたる 枯野かな 虚子」

刊行物番号

2016-65

図書館だより 第240号

平成28年6月25日発行 [市内印刷]

発行 調布市立図書館

〒182-0026 東京都調布市小島町2-33-1

TEL 042-441-6181

<http://www.lib.city.chofu.tokyo.jp/>